Osaka University Knowledge Archive

Title	大阪大学外国学図書館におけるLS活動改善のためのアカデミック・ライティング・スキル学習とその指導の実態調査の結果報告
Author(s)	中村, 瑞樹
Citation	大阪大学高等教育研究. 2024, 12, p. 43-57
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/94844
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

大阪大学高等教育研究　12（2024），43 − 57

【調査報告】

大阪大学外国学図書館におけるLS活動改善のための アカデミック・ライティング・スキル学習とその指導の実態調査の結果報告

中村　瑞樹[※1]

Report on the Survey of Learning/Teaching of Academic Writing Skills, Intended to Seek Ways to Improve LS's Activities in Osaka University International Studies Library

NAKAMURA Mizuki[※1]

大阪大学外国学図書館では，2012年より大学院生ラーニング・サポーター（LS）を配置し，学習支援を行ってきたが，相談利用者や講習会参加者数の低迷に悩まされてきた．こうした現状を打破すべく，外国語学部の学部生と教員に向けて，アカデミック・ライティング・スキル（AWS）学習とその指導に関するアンケート調査を実施した．本報告は，本調査の結果を概観するとともに，結果から得られた示唆をもとに，LS活動の改善策を考察したものである．まず，学部生の多くは，AWS学習の意義を理解しつつも，実際には学べていないと分かった．対して，大多数の教員は意識的に学生へAWS指導を行う一方で，学生のAWSに不満が残る者も多いことが明らかになった．また，図書館利用中に学生がLSを知る可能性が高いこと，広報において授業担当教員からの情報発信が有効と思われること，LS活動についてより詳細かつ具体的な情報発信が必要であることなども明らかになった．

キーワード：図書館TA，ラーニング・コモンズ（LC），大学院生ラーニング・サポーター（LS），アカデミック・ライティング，学習支援，アカデミック・スキル

Osaka University International Studies Library has assigned graduate students as Learning Supporters (LS) in its Learning Commons to offer academic support since 2012, but this service has not been well-known and has been suffering from the low number of participants in consultation sessions and workshops on academic skills. To overcome this situation, the author carried out a survey to investigate the actual conditions of the undergraduate students and the faculty members in the School of Foreign Studies and to explore how the students learn and the teachers teach academic writing skills. This paper reviews the results of this survey and, based on the insights gained from them, considers some effective measures to improve the LSs' activities. First, the findings reveal that, while understanding the significance of learning academic writing skills, many of the undergraduate students do not take time to study them. As for the teachers, it has become clear that they proactively teach the skills to the students, but that they are not satisfied with their students' achievements in academic writing skills. The survey has also made explicit the following tendencies related to the LSs' publicity: 1) the students are most likely to get to know about the LSs when they are using the library, 2) the students think hearing information about the LSs from the faculty members are the most effective, and 3) both the students and the teachers want to know about the LSs in more detail.

所　属：[※1]大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程／大阪大学外国学図書館 ラーニング・サポーター
Affiliation：[※1]Graduate School of Language and Culture, Osaka University/ A Learning Supporter at Osaka University International Studies Library
連絡先：u929264d@ecs.osaka-u.ac.jp（中村　瑞樹）

Keywords：Library TA, Learning Commons, Graduate Students Assigned as Learning Supporters, Academic Writing, Learning Support, Academic Skills.

1　はじめに

1.1 背景と目的

大阪大学附属図書館（以下，阪大図書館）では，2009年4月に理工学図書館における設置を皮切りに，各図書館に学生の共同学習を促すスペースとしてラーニング・コモンズ（以下，LC）を設置してきた（久保山 2014, p. 62）．また，LCには大学院生ラーニング・サポーター（以下，LS；2016年度までは図書館TA）を配置し，学習支援の場を学生に提供してきた．2023年度は，豊中地区の総合図書館，吹田地区の理工学図書館，箕面地区の外国学図書館の3つの図書館にLSが配置されており，図書館のLCを中心に従事している．

筆者は，外国学図書館で2019年度よりLSとして従事してきた．その中で，LS活動に対する学生からの認知度が低く，相談件数も決して多いとは言えない状況が続いていたり，講習会などのイベントを実施しても，参加者がなかなか集まらなかったりといった状況に悩まされていた．こうしたLS活動の認知度の低さは阪大図書館に限ったことではなく，例えば，図書館TAを配置し，パスファインダー作成における先進的な取り組みをしている九州大学附属図書館でも，図書館TAの活動に対する認知度向上が課題として挙げられていることからも（星子，渡邊 2020，p. 34），TAおよびLS活動の認知度を高めることは，阪大図書館はもとより日本の大学図書館の喫緊の課題といって差し支えないだろう．

そこで筆者は，阪大図書館におけるLS活動の認知度を向上させ，学生への学習支援をより行き届かせる方策を検討するため，さらに，利用者のニーズに基づいた支援を提供するため，外国学図書館の担当職員にアンケート調査の実施を提案した．その結果，外国学図書館の協力のもと，調査を実施することとなった．本調査では，LSが主に提供できる支援内容であるアカデミック・ライティング・スキルに関わる支援の在り方を探るため，アカデミック・ライティング・スキルの学習とその指導の実態調査に主眼を置き，外国学図書館の主な利用者である外国語学部生と外国語学部で授業を担当する教員に対しアンケートを実施した．学生向けアンケートは「アカデミック・ライティング・スキル学習の実態調査」，教員向けのものは「アカデミック・ライティング・スキル指導の実態調査」と題した．また，LSの認知度や広報に関する設問も含め，利用者へのサービス提供の在り方を探ることも目指した．

大学図書館におけるLCの活用方法や，LCで従事する図書館TAの活動内容についての報告はこれまでも存在するものの[(1)]，教員や学生の図書館に対するニーズを調査した例や，学生や教員のアカデミック・スキル学習とその指導に対する認識をもとに，図書館TA活動の改善を図った報告などは，管見の限り見当たらない．ゆえに，本調査は，これまでにない視点から大学図書館が提供する学習支援活動を振り返る契機となりうるだろう．

1.2 外国学図書館のLS活動の概要

本節ではまず，外国学図書館におけるLS活動について簡単に述べておきたい．外国学図書館は，外国語学部，人文学研究科外国学専攻・日本学専攻（応用日本学コース），そして，留学生の日本語指導などを担う日本語日本文化教育センター（CJLC）が所属する箕面キャンパスに隣接している．箕面キャンパスが2021年4月に粟生間谷の旧キャンパスから箕面船場の新キャンパスへと移転した際に，外国学図書館も箕面船場に移転し，箕面市立船場図書館として「大学図書館機能を兼ね備えた市立図書館を国立大学法人が運営するという国内初の事例」となった（野原，日髙 2021）．外国学図書館は，大阪外国語大学時代の資料も含む，外国学に関する資料を豊富に所蔵しているのが何よりの特徴である．

外国学図書館では，2012年4月より，旧図書館1F入口横にLC（通称「るくす」）が設置され，同年10月からLSの配置も開始された．箕面船場への移転後も，新図書館3FにLC「るくす」が設置され，学生の共同学習スペースおよびLSの従事場所として用いられている．「るくす」は，新型コロナウイルス感染症拡大により，グループでの発話等を禁止せざるを得なかった期間こそ，共同学習のための場としての本来の目的を果たせなかったものの，制限が緩和された2023年度からは，グループでの発話や什器の移動可能など，他の部屋や席とは異なるコンセプトで利用者に開放している．

写真1　LC「るくす」内のLSデスク

写真2　LC「るくす」の入口

2023年度の外国学図書館LSは，授業期間中の平日に「るくす」にて従事し，学生からの学習相談に対応しつつ，アカデミック・スキルに関する講習会の実施や，パスファインダーの執筆といった作業をしている[(2)]．外国学図書館でLSとして従事しているのは，文学，言語学，社会学等を専門とする大学院生が中心で，2023年度前期は6名の大学院生が従事している．阪大図書館全体で，LSの採用条件として英語で文献が読めることが求められているが，外国学図書館の場合，英語以外の外国語にも対応できるLSが所属しているのが強みの1つと言える．

外国学図書館では，その地理的条件が，LSへの相談者数，相談内容に大いに関わっている．共通教育を受ける全学部の新入生が集まり，文理5学部を抱える豊中キャンパスや，複数の理系学部を抱える吹田キャンパスとは異なり，箕面キャンパスに所属している学部は外国語学部しかない．そのため，外国学図書館LSへの相談内容の大半は人文学系のもので，理系のものはほとんどない．日本語の添削を希望する留学生による相談が多く，その他，ゼミ発表や卒論・レポート執筆に関するもの，研究計画書の執筆や大学院入試対策といった大学院進学に関するもの，そして海外留学に関するものが主たる相談内容である．他にも，LS主催で人文学系アカデミック・スキル講習会や，留学の体験談をもとにした座談会などを開催してもいる．

2　方法

本章では，アンケート調査の概要を述べる．本調査は，事前に外国語学部実施の研究倫理審査に申請し，2023年4月27日の審査の結果，実施の承認を得ている．また，回答者に対しては，調査開始前に倫理的配慮として，データの匿名性を担保することを伝えた上で同意を得ている．

2.1　学生用アンケートの実施方法

- 実施期間：2023年5月16日（火）から2023年6月5日（月）まで
- 対象：外国学図書館の主な利用者として想定される外国語学部所属の2年生以上の学部生．なお，外国語学部1年生は豊中キャンパスが主たる学習場所であることから，今回は調査対象外とした．また，本調査では学部生の実態把握を目的としたため，箕面キャンパス所属の大学院生，CJLC所属の留学生も調査対象外とした．
- 実施媒体：Microsoft Formsを用いたオンライン調査を実施した．阪大図書館WebサイトでURLを広報するとともに，QRコードを掲載したポスターを箕面キャンパス内に3ヵ所掲示した．また，筆者がティーチング・フェロー（TF）[(3)] を担当している講座内や，知り合いの授業担当教員の担当講座内でもアンケートを実施した．
- 設問内容および設問数：①LSの認知について（5問），②アカデミック・ライティング・スキル学習の実態について（5問），③アカデミック・ライティング・スキル学習への姿勢について（4問），④図書館への要望について（1問），の設問を合計15問用意した．なお，設問内容の詳細については資料1を参照のこと．
- 回答総数：131件（内訳：2年生57件，3年生54件，4年生以上20件）．

2.2　教員用アンケートの実施方法

- 実施期間：2023年5月16日（火）から2023年6月5

日（月）まで

- 対象：外国語学部で授業を担当する全ての教員（非常勤講師含む）.
- 実施媒体：Microsoft Formsを用いたオンライン調査を実施した．教員用メーリングリストでURLを広報するとともに，QRコードを掲載したポスターを箕面キャンパス内の教員用メールボックスルームと非常勤講師控室に設置した．また，紙媒体の質問紙も用意し，箕面キャンパス内の教員用メールボックスルームと非常勤講師控室に質問紙と回収ボックスを設置した.
- 設問内容および設問数：①LSの認知について（1問），②アカデミック・ライティング・スキル指導の実態について（5問），③アカデミック・ライティング・スキル指導への姿勢について（5問），④図書館への要望について（1問），の設問を合計12問用意した．なお，設問内容の詳細については資料2を参照のこと.
- 回答総数：40件（内訳：専任教員37件，非常勤講師3件）.

3　結果と考察

本章ではまず，3.1節，3.2節において，アンケート調査で明らかになった外国語学部におけるアカデミック・ライティング・スキル学習とその指導の実態の全体像を述べる．その後の3.3節以降では，本調査の目的である，認知度向上と利用者数増加といった，外国学図書館LS活動の改善につながりそうなデータについて詳しく論じていく.

3.1 外国語学部生のアカデミック・ライティング・スキル学習の実態概要

まずは学生対象アンケートの結果である．本調査に回答した131名の外国語学部生のアカデミック・ライティング・スキル学習の実態として，表1において，こうしたスキルを学習する必要性について，33名（25.2％）が「あると思うので，実際に勉強している」，96名（73.3％）が「あるとは思うが，勉強はしていない」と回答しているように，全体の98.5%に上る129名が認識していることが明らかになった．その一方で，表2のデータが示すように，実際に学習に取り組んだことがあると回答した学生は31名（23.7％）と，決して多くはないことも明らかになった.

表1　アカデミック・ライティング・スキルについて学ぶ必要はあると思いますか.

選択肢	回答数	（%）
1.　あると思うので，実際に勉強している.	33	25.2％
2.　あるとは思うが，勉強はしていない.	96	73.3%
3.　自然に身に付くものだと思うので，わざわざ学ぶ必要はない.	1	0.8％
4.　そもそも身に付けなくてよい.	1	0.8％
合計	131	100.0%

（資料1，7参照）

表2　あなたは今までアカデミック・ライティング・スキルの勉強を自発的にしたことがありますか.

選択肢	回答数	（%）
1.　ある.	31	23.7％
2.　ない.	100	76.3％
合計	131	100.0%

（資料1，8-1参照）

また，「アカデミック・スキルについて誰かに相談したいと思ったことがある」という問いへの回答は，「ある」が63名，「ない」が68名と，ほぼ半々の結果となった．興味深いことに，表3のように，回答者の学年別にクロス集計をしても，どの学年でもまんべんなく半々の結果になった.

表3　「今まで誰かにアカデミック・ライティング・スキルに関する相談をしたいと思ったことがありますか.」に対する回答者の学年別集計結果

		1. ある.	2. ない.	合計
回答者の学年	2年生	28	29	57
	3年生	24	30	54
	4年生以上	11	9	20
	合計	63	68	131

（資料1，4-1参照）

こうした結果を踏まえると，LSとしては各学年にまんべんなく支援を行う必要性がある．また，「学ぶ必要があるとは理解しているが，なかなか実践までは出来ていない」という一般的な学生がアカデミック・ライティング・スキルを身につけ，より充実した学習に取り組めるよう尽力し，LSの存在意義を発揮していく必要性を再確認できたと言える.

また，顕著な結果として，表4にまとめたように，「レポート作成中にアカデミック・ライティング・スキルについて疑問が生まれた時に，あなたはどのように対処す

ると思いますか．当てはまるものを全て選んでください.」という設問に対し，回答した学生131名の65.6%にあたる86名が「Web検索でヒットしたサイトを読む」と回答しており，他の選択肢を圧倒していた．

表4　レポート作成中にアカデミック・ライティング・スキルについて疑問が生まれた時に，あなたはどのように対処すると思いますか．当てはまるものを全て選んでください．（回答者数：131名）

選択肢	回答数（複数回答可）	（%）（分母：131）
1. 先生に相談する．	46	35.1％
2. 図書館職員に相談する．	1	0.8％
3. 図書館ラーニング・サポーター（LS）に相談する．	9	6.9％
4. 図書館ラーニング・サポーター（LS）以外の院生に相談する．	0	0.0％
5. 学部やサークル・部活の先輩に相談する．	20	15.3％
6. 学部やサークル・部活の同期に相談する．	44	33.6％
7. 図書館のWebサイトを調べる．	16	12.2％
8. 図書館ラーニング・サポーター（LS）が発行しているパスファインダー（調べ方案内）を調べる．	5	3.8％
9. Web検索でヒットしたサイトを読む．	86	65.6％
10. Web検索でヒットした動画を見る．	24	18.3％
11. SNSで調べる．	25	19.1％
12. アカデミック・ライティング・スキルに関する本や参考書など，紙媒体の文献を調べる．	34	26.0％
13. ひとまずレポートを完成させる．	27	20.6％
14. その他 ・高校の先生に聞く．	1	0.8％

（資料1，5参照）

インターネットにも有益な資料がアップロードされている場合があるものの，信頼に値しない記事が含まれる可能性も排除できない．こうした結果は，より正確かつ専門的で，個人の状況にあった幅広い情報に学生がアクセスできるよう支援するという，LSの強みを活かすべき場所を明確に示していると言えるだろう．

また，この設問において，「LSに相談する」と回答した学生が9名（6.9%）と少なく，かつ，LS以外の院生に相談すると回答した学生が存在しなかったことは，学部生と院生の間にある心理的距離を示唆するものでもある．その意味で，LSがどのような存在であるのかを明示するなど，学部生にとって親しみやすい存在となれるような改善案も求められると言えるだろう．

3.2 外国語学部担当教員のアカデミック・スキル指導の実態概要

次に教員対象アンケートの結果の概要である．まず，次の表5が示すように，回答した外国語学部専任教員の中の65.7%にあたる23名が，アカデミック・ライティング・スキル指導を「意識的にするようにしている」と回答している．また，同じ設問に対して「全くしていない」と回答した教員はおらず，時間的制約によりできていないとする回答も8件（22.9%）と少なく，おおむね卒論指導のタイミングでは，こうしたスキルの指導が実施されていることが明らかになった．その一方で，表6にまとめた，卒論指導学生以外へのアカデミック・スキル指導についての設問（非常勤講師も対象）では，時間的制約によりできていないという回答の割合が37.5％，「全くしていない」という回答の割合が5.0%と上がっている．このように，卒論指導学生以外へのアカデミック・ライティング・スキル指導までは手が行き届いていないことも現状と言えるだろう．

表5　（外国語学部専任教員のみ）ゼミの卒論指導学生に，卒論の内容とは別に，アカデミック・ライティング・スキル指導をされることはありますか．

選択肢	回答数	（%）
1. 意識的にするようにしている．	23	65.7%
2. したいと思っているが，時間的制約などにより，できていない．	8	22.9％
3. 学生から希望があった場合などはしている．	4	11.4％
4. 全くしていない（学生やTA・TFに任せている）．	0	0.0％
合計 ※無回答2件	35	100.0％

（資料2，2-1参照）

表6　（全員）担当講座の履修生に対して，講義内容とは別に，アカデミック・ライティング・スキル指導をされることはありますか．

選択肢	回答数	（%）
1. 意識的にするようにしている．	16	40.0％
2. したいと思っているが，時間的制約などにより，できていない．	15	37.5％
3. 学生から希望があった場合などはしている．	7	17.5％
4. 全くしていない（学生やTA・TFに任せている）．	2	5.0％
合計	40	100.0％

（資料2，2-2参照）

また，具体的な指導内容については，次の表7，表8が示すように，「参考文献欄の書き方」を挙げた教員が37名（92.5%），「レポート・論文内での引用方法」を挙げた教員が35名（87.5%），「論文の探し方」を挙げた教員が34名（85.0%）と，これらの項目についてはほとんどの教員が指導を行っていることが判明した．一方で，「図書館資料の探し方」「句読法・記号の用い方」，「パラグラフ・ライティングの方法」の指導を行っていると回答した教員の割合はそれぞれ52.5%，50.0％，45.0％，とおおむね50%前後であることから，これらはどちらかと言えば指導の優先順位が低いものとして扱われているようである．

表7　具体的にどのような内容を指導されていますか．当てはまるものを全て選んでください．（回答者数：40名）

選択肢	回答数（複数回答可）	（%）（分母：40）
1. 論文の探し方	34	85.0%
2. 図書館資料の探し方	21	52.5%
3. レポート・論文内での引用方法	35	87.5%
4. 参考文献欄の書き方	37	92.5%
5. パラグラフ・ライティングの方法	18	45.0%
6. 何が剽窃や盗用になるかについて	28	70.0%
7. 句読法・記号の用い方	20	50.0%
8. 脚注・文末脚注の付け方	30	75.0%
9. そもそも指導していない	1	2.5%
10. その他	6	15.0%

（資料2，3参照）

表8　表7の自由記述回答

- 論文の構成のしかた
- APAフォーマットの概要を紹介する時間を1時間設けています
- 論文として適切な日本語の表現
- 問いの立て方，議論のストーリーの組み立て方，正確な表現の使い方など
- 論文にふさわしい語彙や表現，接続詞の用い方等全般
- 論の構成，引用の仕方

（資料2，3参照）

また，教員対象アンケートの顕著な結果として，次の表9が示すように，学生のアカデミック・スキルについて20名（50.0%）が「やや不満である」，6名（15.0%）が「不満である」と回答しているなど，不満が残るとする回答が全体の65%を占めていることも明らかとなった．

表9　最近の学生のレポートや卒業論文などの形式面の質について，どうお考えですか．

選択肢	回答数	（%）
1. 満足している．	1	2.5％
2. やや満足している．	13	32.5％
3. やや不満である．	20	50.0％
4. 不満である．	6	15.0％
5. レポート課題は出していない．	0	0.0％
合計	40	100.0％

（資料2，4参照）

以上のデータから分かるように，外国語学部ではアカデミック・ライティング・スキルに関する指導が広範に行われているものの，学生のスキルについてはまだまだ伸長の余地があるという意見の教員が多数派であると言えるだろう．

3.3 学生を呼び込む秘訣は図書館にあり？－LSの認知度に関するデータをもとに

本節以降では，アンケートで得られた結果を取り上げながら，LS活動の改善案の考察も含めつつ，議論を進めていく．まず，学生への認知度を高める方法についてである．この点について示唆的だったのが，学生向けアンケートの「ラーニング・サポーター（LS）を今後利用してみたいと思いますか．」という設問に対して，「思う」と回答した75名が理由を選ぶ設問への回答だった．

表10　LSを今後利用してみたいと思う理由．（回答者数：75名）

選択肢	回答数（複数回答可）	（%）（分母：75）
1. 大学院生の方が質問しやすいから．	20	26.7%
2. 周りに相談できる人がいないから．	30	40.0%
3. 図書館だと気軽に足を運べるから．	37	49.3%
4. Zoomやメールでも気軽に相談できるから．	10	13.3%
5. 自分と同じ悩みや疑問を持った経験がありそうだから．	16	21.3%
6. 大学院進学について相談できるから．	14	18.7%
7. 留学について相談できるから．	13	17.3%
8. 自分の学んでいる分野に詳しそうだから．	17	22.7%
9. 年齢が近いから．	12	16.0%

（資料1，2-2参照）

ここで，全回答のうち37件（49.3%）と，最も回答数を集めたのが，「図書館だと気軽に足を運べるから」だった．外国学図書館は講義棟とは別の建物でありながら，

徒歩1分もかからない立地であり，千里中央駅から徒歩で通学している学生からすれば，通学路の途中でもあることや，アクセスしやすい自習場所でもあることからか，こちらが想定しているよりも，気軽に足を運べる場所として認識されているようである．さらに，次の表11が示すように，LSを知っているとする57名の学生向けの「ラーニング・サポーター（LS）をどこで知りましたか」という設問でも，最多票として，38名（66.7％）が「図書館に足を運んだ時に知った」と回答していた．

表11　LSをどこで知りましたか．（回答者数：57名）

選択肢	回答数（複数回答可）	（%）（分母：57）
1. 先生から紹介があった．	7	12.3％
2. 先輩・友達など他の学生から聞いた．	6	10.5％
3. 阪大図書館Webサイトを見た．	10	17.5％
4. KOANの掲示を見た．	8	14.0％
5. 図書館やラーニング・サポーター（LS）のTwitterを見た．	4	7.0％
6. 図書館に足を運んだ時に知った．	38	66.7％
7. 図書館職員から紹介があった．	5	8.8％

（資料1，1-2参照）

これらを踏まえると，LSの存在を周知するためには，第一に図書館に足を運ぶ学生を増やす工夫，そして，LS目当てで図書館に来たわけではない学生が，図書館滞在中にLSの存在を認知し，今後の利用を検討する，という流れを構築できるような工夫が求められると言える．

3.4 広報の鍵は授業担当教員？ー新たな広報戦略や教員との連携の在り方を探る

学生へのアンケートでは，「ラーニング・サポーター（LS）に関する情報発信をする際，どの媒体であればみなさんに情報が届きやすいでしょうか．当てはまるとお考えのものを最大3つ選んでください．」という質問を設け，今後の広報戦略について検討することも目指した．この設問への回答をまとめたのが次の表12である．

表12　ラーニング・サポーター（LS）に関する情報発信をする際，どの媒体であればみなさんに情報が届きやすいでしょうか．当てはまるとお考えのものを最大3つ選んでください．（回答者数：131名）

選択肢	回答数（3つまで回答可）	（%）（分母：131）
1. 授業などで先生から紹介してもらう	100	76.3％
2. ポスターなど食堂や学生交流スペースでの掲示	46	35.1％
3. 図書館内の掲示	31	23.7％
4. 図書館のWebサイト	15	11.5％
5. KOANの掲示	51	38.9％
6. 図書館ラーニング・サポーター（LS）のTwitter	17	13.0％
7. 図書館やラーニング・サポーター（LS）のInstagram	19	14.5％
8. 図書館YouTubeチャンネルの動画	5	3.8％
9. 学内の掲示板やデジタルサイネージ	7	5.3％
その他・メール．	1	0.8％

（資料1，3参照）

まず，Twitter（現X）やInstagramといったSNS，および図書館Webサイトを見ると答えた学生は回答者131名のうち15%を上回ることがなく，有効な広報手段とは呼べないことが明らかになった．

一方で，本設問への回答としてなにより目を引くのが，「授業などで先生から紹介してもらう」を選んだ学生が回答者131名中の100名（76.3％）に達していることである．つまり，学生への周知において一番のキーパーソンは，授業担当教員なのである．授業中に教員から指示を受けた方が，学生も図書館に足を運びやすいのだと考えられる．これまで，教員側にLSの広報を依頼するような試みは積極的には実施していなかったし，本調査の結果，そもそもLSの活動を知らない教員がいることも明らかになった．今後はまず，教員にLS活動の紹介を積極的に行い，学生に広報してもらえるように協力を依頼するなど，教員とのネットワーク構築がLS認知度向上における鍵となると言えるだろう．

他にも，「KOANの掲示」「ポスターなど食堂や学生交流スペースでの掲示」などの選択肢も，それぞれ51名（38.9%），46名（35.1%）が選択しており，他の選択肢よりも多くの回答数を集めた[(4)]．「KOANの掲示」はこれまでも実施してきた方策ではあるものの，講習会などのイベント実施時しか広報をしていなかった．今後は，期末期に相談デスクの存在を周知する通知を流すなど，広報機会を増やすことが効果的かもしれない．

また，次の表13，表14は，教員側のLS活動に対する

イメージを問う設問の結果をまとめたものである．表13において，「図書館がアカデミック・ライティング・スキル指導の一翼を担ってくれるのはありがたい」に対して「そう思う」と肯定的な回答をした教員が全体の80.0%にあたる32名いたことや，表14において「LSによるアカデミック・ライティング・スキル指導を学部生に勧めたい」に対して「そう思う」と肯定的な回答をした教員が全体の62.5%にあたる25名いたことが示すように，LS制度を積極的に捉え，学生に勧めたいと考えている教員が多いことも分かった．

表13　図書館がアカデミック・ライティング・スキル指導の一翼を担ってくれるのはありがたい．

選択肢	回答数	(%)
1.　そう思う．	32	80.0％
2.　どちらかと言えばそう思う．	7	17.5％
3.　どちらかと言えばそうは思わない．	0	0.0％
4.　そうは思わない．	1	2.5％
合計	40	100.0％

（資料2，8参照）

表14　LSによるアカデミック・ライティング・スキル指導を学部生に勧めたい．

選択肢	回答数	(%)
1.　そう思う．	25	62.5％
2.　どちらかと言えばそう思う．	13	32.5％
3.　どちらかと言えばそうは思わない．	1	2.5％
4.　そうは思わない．	1	2.5％
合計	40	100.0％

（資料2，9参照）

自由記述の回答において，まだまだ学識や経験が浅い大学院生が学部生を指導することへの慎重な意見もあったが，表13，表14が示すように，おおむねLS活動を好意的に捉える回答がほとんどだった．こうしたデータは積極的に教員へ働きかけをする後押しとなろう．

さらに，教員側からの回答には，学生は義務と言われない限り講習会等に参加しないと思われるので，学生がうまく利用できるような仕組みを考えたいという旨の回答や，図書館での講習会を頻回にしてもらえれば，ゼミの学生に必ず受けるように課したいと思う，という旨の回答など，図書館との連携に関するものも含まれていた．例えば，LS講習会に参加し，アカデミック・ライティング・スキルを学習することを授業外課題として義務化するといった取り組みは，一朝一夕で制度化できるものではないものの，こうした教員と図書館との連携が綿密になることで，より多くの学生にアカデミック・ライティング・スキル学習の機会が届くことが期待できる．現時点でも，図書館職員が特定のゼミに出張し，資料検索ガイダンスなどを行っているが，こうした活動の幅を広げ，ゆくゆくは図書館（LS）と教員，ないし学部が連携した学習支援の形を構築していくことも，長期的な課題にはなるものの，念頭に置くべき価値がある事案であろう．

3.5 不透明なLSという存在

ここまで，LSの認知度を高めるための広報の新たなアプローチへの可能性を論じてきたが，やはり，そもそもLSを認知している学生が少ないこと，そして，LSを認知してはいても，実際に利用にまで踏み込める学生が多くないことにも対処していく必要がある．表15が示すように，LSを知っていると回答した学生は，「知っていて，実際に相談に行ったり，講習会に参加したりしたことがある」と「知っているが，実際に相談などに行ったことはない」の選択肢のどちらかを選んだ57名（43.5%）と，そもそも半数を下回っている．それだけでなく，前者を選択した，実際にLS活動を利用したことがある学生は7名（5.3%）に過ぎないことも明らかになった．

表15　ラーニング・サポーター（LS）の活動はご存じですか．

選択肢	回答数	(%)
1.　知っていて，実際に相談に行ったり，講習会に参加したりしたことがある（豊中の総合図書館など，他館も含む）．	7	5.3％
2.　知っているが，実際に相談などに行ったことはない．	50	38.2％
3.　知らなかった．	74	56.5％
合計	131	100.0％

（資料1，1-1参照）

また，学生側教員側の回答ともに，LSがどんな人物か分からない，どのような指導がされているのか分からないといった回答が存在していた．具体的には，「LSを今後利用してみたいと思わない」と回答した学生56名に対してその理由を問う設問では，「どんな人がいるのかイメージが付かないから」と回答した学生が18名（32.1%）存在していた．また，教員用アンケートにおける自由記述欄では，LS活動を学生に勧めようにも，LSによる指導内容が具体的に分からないとの意見が2例あった．この点を改善するためにも，LSとはどのよ

うな存在で，どういった経歴を持っているのかを公開し，学生がLSに話しかけやすくするための工夫を施すことは急務と言えるだろう．

3.6 浮き彫りになった学生と教員の間の認識の齟齬

本調査に回答した学生のうち，90名（68.7％）の学生が「課題レポートを，学術論文としてふさわしい形式で書いていますか」という問いに対して，「書いている」「どちらかと言えば書いている」と肯定的な回答を残していた．

表16　あなたは課題レポートを，学術論文としてふさわしい形式で書いていますか．

選択肢	回答数	（%）
1.　書いている．	14	10.7％
2.　どちらかと言えば書いている．	76	58.0％
3.　どちらかと言えば書いていない．	35	26.7％
4.　書いていない．	6	4.6％
合計	131	100.0％

（資料1，6-1参照）

その一方で印象的なのは，3.2節で言及したように，教員側は学生の成果物に対して必ずしも満足しておらず，どちらかと言えば不満を持っている教員の方が多いという調査結果である．

個々の教員が求めるレベルにもよるが，学生が自分なりに頑張った成果と，教員が求めるレベルの間に齟齬があることを浮き彫りにできたのは，本調査の大きな成果の一つだと考えている．もちろん，学生は文字通り学びの途上にいるため，教員としても満足いかない点があること自体は，そこまで大きな問題ではないかもしれない．一方で，学生は少なくとも在学期間のうちにアカデミック・ライティング・スキルを身につける必要があるだろうし，LSとしても学びの機会を積極的に提供していく必要があるだろう．事実，こうしたスキルを身につけ，より充実した学術レポートを完成させることは，彼らがより充実した学びや成果を手に入れることに繋がるだけでなく，こうしたスキルをもとにさらなる広範なスキルを身につけることにも繋がるなど，学生にとってのメリットも大きい．

これらをもとにLSの広報を考えると，本調査で得られた教員側の意見をもとに学生が改善すべき点を明示化し，学生がアカデミック・ライティング・スキルを学ぶ意義をより自分事として捉えさせることで，より多くの学生の参加を望めるのではないだろうか．なお，教員側が挙げた学生の要改善点を次の表17，表18にまとめている．

表17　学生のレポートや卒業論文などの形式面で，改善が必要だと思われる点を全て選んでください．

選択肢	回答数（複数回答可）	（%）（分母：40）
1.　参考文献が少ない．	23	57.5％
2.　参考文献の質が低い（ネットから仕入れた情報ばかり，など）．	30	75.0％
3.　引用の形式が整っていない．	23	57.5％
4.　剽窃と正しい引用方法が区別できていない．	16	40.0％
5.　参考文献欄が整っていない．	22	55.0％
6.　注の付け方が整っていない．	23	57.5％
7.　パラグラフ・ライティングができていない．	17	42.5％
8.　特に不満に思うところはない／レポート課題を出していない．	2	5.0％
9.　その他	10	25.0％

（資料2，5参照）

表18　表17の「その他」での自由記述回答の抜粋

- 自分の主張を文章にまとめられない．
- スペースの取り方，フォントの選び方，適切な文体の選択
- 日本語が拙い者が多い．
- 議論がわかりやすく一貫した形で提示されていない．
- 方法論や先行研究を十分理解していない．
- 文章が読みにくい．
- 学術的な問いがない．
- 主語と述語のねじれや，何を言わんとするのか不明な文などが多く，人に読ませる文章になっていない．
- 接続詞など文と文，段落と段落をつなぐ表現が足りない．
- 長文を書く力が足りない．

（資料2，5参照）

学生の成果物の要改善点として，「4. 剽窃と正しい引用方法が区別できていない」「7. パラグラフ・ライティングができていない」以外の項目の選択率が50％を超えることや，「2. 参考文献の質が低い」に至っては4人中3人の教員から選択されている現状は，学生がアカデミック・ライティング・スキルの改善を自分事として捉えるには十分なデータであるように思われる．各項目は，すぐに改善できるものから，時間をかけて身につけるべきスキルまで多岐にわたるものの，全てLSが支援できるタイプのスキルである．学生にとっても，多くの教員が課題として挙げている点から改善する方が，効率が良いと感じられることだろう．また，それぞれのスキルを身につけるのにかかる労力や時間は学部生には判断しづらい部分もあるため，少しの知識を身につけるだけ

で大幅に改善できるものから順にステップアップしていくような道筋に沿った講習会プランなどを示すことも，学生がLS活動に参加することへのハードルを下げることに繋がるのではないだろうか．

また，教員からの回答で目立った，学生の参考文献の質の低さの改善については，LSとしても積極的に取り組むべきテーマであろう．本調査では，学生がどのようなソースから学術資料を収集しているかまでは調査していないものの，3.1節の表4で取り上げたアカデミック・ライティング・スキル学習に用いる情報源同様に，彼らはおそらくインターネット検索をした際に手に入れた資料を中心に扱い，図書館の蔵書やオンラインデータベースにまでアクセスすることは少ないと推測される．また，利用している資料がアカデミックなものかどうかや，査読付き学会誌に掲載の論文なのか紀要論文なのかどうかといった，学術資料の質を精査する基準を多くの学生が持っているとも考えにくい．こうした，学術資料の検索法や，資料を精査する基準といったものは，昼休みの講習会1回で大まかな内容をカバーできるだけでなく，一度学べば幅広く応用できる知識である．こうした短い講習会を頻回に実施し，まずは学生がLSとの繋がりを持つ機会を得られるようにしたいところである．

さらに，表18に載せた自由記述回答に多く見られるように，学生の文体，作文力，日本語力そのものの改善も急務であろう．相手に伝わるよう読み手に配慮した文章を書く，適切な文体を選択し文章を書く，といったスキルは大学卒業後も必須のスキルである．しかし，こうした文章の書き方一般を振り返る機会も，学生にとって必要でありながら，なかなか時間が取れないものなのだろう．先ほどの資料検索スキル同様，こういった文章力にまつわるスキルも汎用性が高い．LS講習会に参加して身につけられるアカデミック・ライティング・スキルは，学生の今後のキャリアでも有益で汎用性の高いものだが，現状LS講習会の広報では，アカデミックな側面に傾倒したキャッチフレーズの使用に偏っていたようにも思われる．こうしたスキルを身につけることの汎用性などにも言及しながら広報を行い，LS講習会参加者の裾野を広げていくことも，今後のLS活動の改善において有効だろう．

4　おわりに

本稿では，外国学図書館のLS活動の改善を目指すべく行ったアンケート調査の結果をもとに，今後の改善案をいくつか提示してきた．惜しむらくは，アンケートの回答数が決して多いとは言えず，より幅広いデータや意見を収集できなかったことである．また，本稿では，比較的目に見えて分かりやすいデータをさらう形で行った考察がほとんどで，回答者の属性に基づくクロス集計など，より精緻な分析に欠けていることから，考察が表層的だったことは認めざるを得ない．本調査で回収したデータをより幅広い視点から分析し，利用者のニーズをより正確に捉えていくことを今後の課題としたい．

とはいえ，こうした課題は残るものの，客観的なデータを収集することによって，関係者のみで検討してきた改善案に加え，よりニーズに沿った具体的な改善案を生み出すことにつながったと考えている．今後，図書館内でこれらの課題について検討し，実施できる改善策は早急に実施し，それらの効果を検証していく予定である．学習支援を必要とする学生を取りこぼすことのないように，また，これまで支援を必要としていなかった学生からも認知してもらい，従来よりも幅広く学生を支援できるように，さらなる調査や実践を重ね，有益な活動を続けていきたい．

受付2023.10.2／受理2024.1.12

謝辞

筆者は，大阪大学全学教育推進機構教育学習支援部が大学院生向けに開講する大阪大学大学院等高度副プログラム「未来の大学教員養成プログラム」を2022年に修了しました．プログラム構成科目「大学授業開発論Ⅲ」の主担当でいらっしゃった大山牧子先生（神戸大学教育推進機構大学教育推進センター准教授）には，SoTL研究の方法をご教授いただいたとともに，研究成果を投稿することを奨励していただきました．また，大山先生には本アンケート調査の設問作成や実施について，ならびに，本稿執筆についてもご助言いただきました．この場をお借りして御礼申し上げます．

また，本調査の趣旨に賛同いただき，実施を後押ししてくださった大阪大学附属図書館外国学図書館の職員のみなさまにも御礼申し上げます．特に，外国学図書館利用支援担当職員の山本典子さん，江川実喜子さん，坂田絵理子さん（2023年4月より総合図書館学習・調査担当）には，アンケート調査の企画から実施，報告書執筆の全ての場面において，多くの時間を割いて，多大なるご支援をいただきました．図書館関係者のみなさまのご協力がなければ，本稿の完成はおろか，アンケートの実施す

ら叶っていなかったに違いありません．この場をお借りして，深く謝意を表します．

最後に，本調査に回答いただいた外国語学部生のみなさま，外国語学部授業担当教員のみなさま，そして，本調査の広報にご協力いただいた先生方，箕面キャンパス事務室のみなさまにも御礼申し上げます．

注

(1) 例えば，参考文献欄にあげた，茂出木2008，呑海，溝上2011，辻2015などが，この分野の先行文献として挙げられる．

(2) 外国学図書館におけるLS活動のより詳細な内容，特にパスファインダーの執筆については，参考文献欄にあげた中村執筆の文献を参照されたい．

(3) 大阪大学では，博士後期課程の学生が「教育展開能力を育成するための区分」としてティーチング・アシスタント（TA）よりも上位の身分としてティーチング・フェロー（TF）が設定されている．『大阪大学TA・TFハンドブック』によれば，「教員の教育上の指導のもと，教育活動における補助的な教育業務の内容を自ら計画の上，授業等の進行管理をしながら展開して実施することを主たる業務内容とする」と定義づけされている．

(4) KOANとは，オンライン掲示板を含む，大阪大学の教育業務支援システムの名称である．

参考文献

久保山健「大阪大学の新たな学習空間『グローバル・コモンズ』－その整備と教育実践」『大阪大学高等教育研究』第2号，大阪大学全学教育推進機構，2014年，pp. 61-67.

辻慶太「図書館の利用を増加させるラーニング・コモンズ像に関する基礎調査」『図書館界』67巻4号，日本図書館研究会，2015年，pp. 210-227.

呑海沙織，溝上智恵子「大学図書館におけるラーニング・コモンズの学生アシスタントの意義」『図書館界』63号2巻，日本図書館研究会，2011年，pp. 176-184.

中村瑞樹「大阪大学附属外国学図書館のパスファインダー『るくぱす』」『びぶろす』95号，国立国会図書館総務部，2022年，pp. 16-20，https://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_12360496_po_95.pdf?contentNo=1.（最終閲覧日：2023年10月2日）

野原亜希，日髙正太郎「箕面市立船場図書館の開館：指定管理者としての取り組みから」『カレントアウェアネス・ポータル』，2021年，https://current.ndl.go.jp/e2427.（最終閲覧日：2023年10月2日）

星子奈美，渡邊由紀子「図書館TAとともに創るパスファインダー－九州大学附属図書館のWeb学習ガイドCute.Guidesを例に」『九州大学附属図書館研究開発室年報』第2019/2020号，九州大学附属図書館，2020年，pp. 27-36.

茂出木理子「ラーニング・コモンズの可能性：魅力ある学習空間へのお茶の水女子大学のチャレンジ」『情報の科学と技術』58巻7号，情報科学技術協会，2008年，pp. 341-346.

資料1：

学生を対象とした「大阪大学外国語学部におけるアカデミック・ライティング・スキル学習の実態調査」設問および回答数一覧

1-1.　ラーニング・サポーター（LS）の活動はご存じですか.

選択肢	回答数	（%）
1.　知っていて，実際に相談に行ったり，講習会に参加したりしたことがある（豊中の総合図書館など，他館も含む）.	7	5.3 %
2.　知っているが，実際に相談などに行ったことはない.	50	38.2 %
3.　知らなかった.	74	56.5 %
合計	131	100.0 %

1-2.　ラーニング・サポーター（LS）をどこで知りましたか. 当てはまるものを全て選んでください.

選択肢	回答数（複数回答可）	（%）（分母：57）
1.　先生から紹介があった.	7	12.3 %
2.　先輩・友達など他の学生から聞いた.	6	10.5 %
3.　阪大図書館Webサイトを見た.	10	17.5 %
4.　KOANの掲示を見た.	8	14.0 %
5.　図書館やラーニング・サポーター（LS）のTwitterを見た.	4	7.0 %
6.　図書館に足を運んだ時に知った.	38	66.7 %
7.　図書館職員から紹介があった.	5	8.8 %

2-1.　ラーニング・サポーター（LS）を今後利用してみたいと思いますか.

選択肢	回答数	（%）
1.　思う.	75	57.3%
2.　思わない.	56	42.7%
合計	131	100.0%

2-2.　なぜ「思う」と思われましたか. 当てはまるものを全て選んでください.

選択肢	回答数（複数回答可）	（%）（分母：75）
1.　大学院生の方が質問しやすいから.	20	26.7%
2.　周りに相談できる人がいないから.	30	40.0%
3.　図書館だと気軽に足を運べるから.	37	49.3%
4.　Zoomやメールでも気軽に相談できるから.	10	13.3%
5.　自分と同じ悩みや疑問を持った経験がありそうだから.	16	21.3%
6.　大学院進学について相談できるから.	14	18.7%
7.　留学について相談できるから.	13	17.3%
8.　自分の学んでいる分野に詳しそうだから.	17	22.7%
9.　年齢が近いから.	12	16.0%

2-3.　なぜ「思わない」と思われましたか. 当てはまるものを全て選んでください.

選択肢	回答数（複数回答可）	（%）（分母：56）
1.　大学院生には話しかけづらいから.	13	23.2%
2.　周りに相談できる相手がいるから.	9	16.1%
3.　図書館に足を運ぶのが面倒だから.	11	19.6%
4.　どんな人がいるのかイメージが付かないから.	18	32.1%
5.　自分が質問したい分野に詳しい人がいるか分からないから.	5	8.9%
6.　何を聞いたらいいのか分からないから.	21	37.5%
7.　先生からの指導の方が信用できるから.	1	1.8%
8.　自分の力で解決できると思うから.	8	14.3%
9.　学習について特に困っていることはないから.	15	26.8%
10.　その他	2	3.6 %
その他自由記述 ・忙しくて時間がないから. ・よく分からない.		

3.　ラーニング・サポーター（LS）に関する情報発信をする際，どの媒体であればみなさんに情報が届きやすいでしょうか. 当てはまるとお考えのものを最大3つ選んでください.

選択肢	回答数（3つまで回答可）	（%）（分母：131）
1.　授業などで先生から紹介してもらう	100	76.3 %
2.　ポスターなど食堂や学生交流スペースでの掲示	46	35.1 %
3.　図書館内の掲示	31	23.7 %
4.　図書館のWebサイト	15	11.5 %
5.　KOANの掲示	51	38.9 %
6.　図書館ラーニング・サポーター（LS）のTwitter	17	13.0 %
7.　図書館やラーニング・サポーター（LS）のInstagram	19	14.5 %
8.　図書館YouTubeチャンネルの動画	5	3.8 %
9.　学内の掲示板やデジタルサイネージ	7	5.3 %
その他 ・メール.	1	0.8 %

4-1.　今まで誰かにアカデミック・ライティング・スキルに関する相談をしたいと思ったことがありますか.

選択肢	回答数	（%）
1.　ある.	63	48.1%
2.　ない.	68	51.9%
合計	131	100.0%

4-2. その時は，どのように対処しましたか．当てはまるものを全て選んでください．

選択肢	回答数（複数回答可）	（%）（分母：63）
1. 先生に相談した．	18	28.6%
2. 図書館職員に相談した．	1	1.6%
3. 図書館ラーニング・サポーター（LS）に相談した．	1	1.6%
4. 阪大図書館LS以外の院生に相談した．	0	0.0%
5. 学部やサークル・部活の先輩に相談した．	4	6.3%
6. 学部やサークル・部活の同期に相談した．	11	17.5%
7. 図書館のWebサイトを調べた．	5	7.9%
8. 図書館ラーニング・サポーター（LS）が発行しているパスファインダー（調べ方案内）を調べた．	2	3.2%
9. Web検索でヒットしたサイトを読んだ．	34	54.0%
10. Web検索でヒットした動画を見た．	10	15.9%
11. SNSで調べた．	11	17.5%
12. アカデミック・ライティング・スキルに関する本や参考書など，紙媒体の文献を調べた．	17	27.0%
13. 何もしなかった．	9	14.3%
14. その他	0	0.0%

5. レポート作成中にアカデミック・ライティング・スキルについて疑問が生まれた時に，あなたはどのように対処すると思いますか．当てはまるものを全て選んでください．

選択肢	回答数（複数回答可）	（%）（分母：131）
1. 先生に相談する．	46	35.1 %
2. 図書館職員に相談する．	1	0.8 %
3. 図書館ラーニング・サポーター（LS）に相談する．	9	6.9 %
4. 阪大図書館LS以外の院生に相談する．	0	0.0 %
5. 学部やサークル・部活の先輩に相談する．	20	15.3 %
6. 学部やサークル・部活の同期に相談する．	44	33.6 %
7. 図書館のWebサイトを調べる．	16	12.2 %
8. 図書館ラーニング・サポーター（LS）が発行しているパスファインダー（調べ方案内）を調べる．	5	3.8 %
9. Web検索でヒットしたサイトを読む．	86	65.6 %
10. Web検索でヒットした動画を見る．	24	18.3 %
11. SNSで調べる．	25	19.1 %
12. アカデミック・ライティング・スキルに関する本や参考書など，紙媒体の文献を調べる．	34	26.0 %
13. ひとまずレポートを完成させる．	27	20.6 %
14. その他 ・ 高校の先生に聞く．	1	0.8 %

6-1. あなたは課題レポートを，学術論文としてふさわしい形式で書いていますか．

選択肢	回答数	（%）
1. 書いている．	14	10.7 %
2. どちらかと言えば書いている．	76	58.0 %
3. どちらかと言えば書いていない．	35	26.7 %
4. 書いていない．	6	4.6 %
合計	131	100.0 %

6-2. 直前の質問への回答理由として当てはまるものがあれば，全て選んでください（成績評価などに関わるものではありませんので，率直にお答えください）．

選択肢	回答数（複数回答可）	（%）（分母：131）
1. 内容だけでなく形式面も重要だと思うから．	77	58.8%
2. 内容がよければ形式面は重要ではないと思うから．	8	6.1%
3. 課題を提出することに精いっぱいだから．	40	30.5%
4. いい成績を取りたいから．	29	22.1%
5. 単位がもらえれば十分だから．	23	17.6%
6. 形式を整えて提出する方が，先生からの印象がいいと思うから．	32	24.4%
7. 先生はそこまでチェックしているとは思わないから．	4	3.1%
8. その他	3	2.3%

その他自由記述
・論理的な文章を書く上でアカデミックライティングの形式が最適なため．
・書き方が分からないから．
・まだそこまで要求されていると思っていないから．

7. アカデミック・ライティング・スキルについて学ぶ必要はあると思いますか．

選択肢	回答数	（%）
1. あると思うので，実際に勉強している．	33	25.2 %
2. あるとは思うが，勉強はしていない．	96	73.3%
3. 自然に身に付くものだと思うので，わざわざ学ぶ必要はない．	1	0.8 %
4. そもそも身に付けなくてよい．	1	0.8 %
合計	131	100.0%

8-1. あなたは今までアカデミック・ライティング・スキルの勉強を自発的にしたことがありますか．

選択肢	回答数	（%）
1. ある．	31	23.7 %
2. ない．	100	76.3 %
合計	131	100.0%

8-2.　どのような内容を勉強しましたか．当てはまるものを全て選んでください．

選択肢	回答数（複数回答可）	（%）（分母：31）
1.　論文の探し方	17	54.8%
2.　図書館資料の探し方	13	41.9%
3.　レポート・論文内での引用方法	26	83.9%
4.　参考文献欄の書き方	24	77.4%
5.　パラグラフ・ライティングの方法	20	64.5%
6.　何が剽窃や盗用になるかについて	19	61.3%
7.　句読法・記号の用い方	9	29.0%
8.　脚注・文末脚注の付け方	13	41.9%

8-3.　どこで学びましたか．あるいは，誰から教えてもらいましたか．当てはまるものを全て選んでください．

選択肢	回答数（複数回答可）	（%）（分母：31）
1.　先生	22	71.0%
2.　図書館職員	3	9.7%
3.　図書館ラーニング・サポーター（LS）	2	6.5%
4.　図書館ラーニング・サポーター（LS）以外の院生	1	3.2%
5.　学部やサークル・部活の先輩	2	6.5%
6.　学部やサークル・部活の同期	3	9.7%
7.　図書館のWebサイト	5	16.1%
8.　図書館ラーニング・サポーター（LS）が発行しているパスファインダー（調べ方案内）	5	16.1%
9.　Web検索でヒットしたサイト	19	61.3%
10.　Web検索でヒットした動画	5	16.1%
11.　SNS	4	12.9%
12.　アカデミック・ライティング・スキルに関する本や参考書など，紙媒体の文献	16	51.6%

9.　図書館やラーニング・サポーター（LS）の活動についてのご意見や，行ってほしい学習支援などのご希望などがあれば，お聞かせください．（任意回答）

割愛

10.　学年

選択肢	回答数	（%）
2年生	57	43.5%
3年生	54	41.2%
4年生以上	20	15.3%
合計	131	100.0%

11.　専攻

割愛

資料2：

教員を対象とした「大阪大学外国語学部におけるアカデミック・ライティング・スキル指導の実態調査」設問および回答数一覧

1.　ラーニング・サポーター（LS）の活動はご存じですか．

選択肢	回答数	（%）
1.　知っている．学生に勧めたことがある．	12	30.0%
2.　知っている．学生に勧めたことはない．	16	40.0%
3.　知らなかった．	12	30.0%
合計	40	100.0％

2-1.　（外国語学部専任教員のみ）ゼミの卒論指導学生に，卒論の内容とは別に，アカデミック・ライティング・スキル指導をされることはありますか．

選択肢	回答数	（%）
1.　意識的にするようにしている．	23	65.7%
2.　したいと思っているが，時間的制約などにより，できていない．	8	22.9％
3.　学生から希望があった場合などはしている．	4	11.4％
4.　全くしていない（学生やTA・TFに任せている）．	0	0.0％
合計 ※無回答2件	35	100.0％

2-2.　（全員）担当講座の履修生に対して，講義内容とは別に，アカデミック・ライティング・スキル指導をされることはありますか．

選択肢	回答数	（%）
1.　意識的にするようにしている．	16	40.0％
2.　したいと思っているが，時間的制約などにより，できていない．	15	37.5％
3.　学生から希望があった場合などはしている．	7	17.5％
4.　全くしていない（学生やTA・TFに任せている）．	2	5.0％
合計	40	100.0％

3. 具体的にどのような内容を指導されていますか．当てはまるものを全て選んでください．

選択肢	回答数（複数回答可）	（%）（分母：40）
1. 論文の探し方	34	85.0%
2. 図書館資料の探し方	21	52.5%
3. レポート・論文内での引用方法	35	87.5%
4. 参考文献欄の書き方	37	92.5%
5. パラグラフ・ライティングの方法	18	45.0%
6. 何が剽窃や盗用になるかについて	28	70.0%
7. 句読法・記号の用い方	20	50.0%
8. 脚注・文末脚注の付け方	30	75.0%
9. そもそも指導していない	1	2.5%
10. その他	6	15.0%

・論文の構成のしかた．
・APAフォーマットの概要を紹介する時間を1時間設けています．
・論文として適切な日本語の表現．
・問いの立て方，議論のストーリーの組み立て方，正確な表現の使い方など．
・論文にふさわしい語彙や表現，接続詞の用い方等全般．
・論の構成，引用の仕方．

4. 最近の学生のレポートや卒業論文などの形式面の質について，どうお考えですか．

選択肢	回答数	（%）
1. 満足している．	1	2.5％
2. やや満足している．	13	32.5％
3. やや不満である．	20	50.0％
4. 不満である．	6	15.0％
5. レポート課題は出していない．	0	0.0％
合計	40	100.0％

5. 学生のレポートや卒業論文などの形式面で，改善が必要だと思われる点を全て選んでください．

選択肢	回答数（複数回答可）	（%）（分母：40）
1. 参考文献が少ない．	23	57.5％
2. 参考文献の質が低い（ネットから仕入れた情報ばかり，など）．	30	75.0％
3. 引用の形式が整っていない．	23	57.5％
4. 剽窃と正しい引用方法が区別できていない．	16	40.0％
5. 参考文献欄が整っていない．	22	55.0％
6. 注の付け方が整っていない．	23	57.5％
7. パラグラフ・ライティングができていない．	17	42.5％
8. 特に不満に思うところはない／レポート課題を出していない．	2	5.0％
9. その他	10	25.0％

（自由記述回答より抜粋）
・自分の主張を文章にまとめられない．
・スペースの取り方，フォントの選び方，適切な文体の選択．
・日本語が拙い者が多い．
・議論がわかりやすく一貫した形で提示されていない．
・方法論や先行研究を十分理解していない．
・文章が読みにくい．
・学術的な問いがない．
・語と述語のねじれや，何を言わんとするのか不明な文などが多く，人に読ませる文章になっていない．
・接続詞など文と文，段落と段落をつなぐ表現が足りない．
・長文を書く力が足りない．

6. アカデミック・ライティング・スキルは学生が授業外学習として自主的に学ぶべきものである．

選択肢	回答数	（%）
1. そう思う．	6	15.0%
2. どちらかと言えばそう思う．	14	35.0%
3. どちらかと言えばそうは思わない．	16	40.0%
4. そうは思わない．	4	10.0%
合計	40	100.0％

7. 教員は学生へのアカデミック・ライティング・スキル指導に責任がある．

選択肢	回答数	（%）
1. そう思う．	15	37.5%
2. どちらかと言えばそう思う．	22	55.0%
3. どちらかと言えばそうは思わない．	3	7.5%
4. そうは思わない．	0	0.0%
合計	40	100.0％

8. 図書館がアカデミック・ライティング・スキル指導の一翼を担ってくれるのはありがたい．

選択肢	回答数	（%）
1. そう思う．	32	80.0％
2. どちらかと言えばそう思う．	7	17.5％
3. どちらかと言えばそうは思わない．	0	0.0％
4. そうは思わない．	1	2.5％
合計	40	100.0％

9. ラーニング・サポーター（LS）によるアカデミック・ライティング・スキル指導を学部生に勧めたい．

選択肢	回答数	（%）
1. そう思う．	25	62.5％
2. どちらかと言えばそう思う．	13	32.5％
3. どちらかと言えばそうは思わない．	1	2.5％
4. そうは思わない．	1	2.5％
合計	40	100.0％

10. 9.の回答への理由をお聞かせください．（任意回答）

割愛

11. その他，図書館やラーニング・サポーター（LS）による外国語学部生へのアカデミック・ライティング・スキル指導に関するご要望や，改善が必要と思われる点に関するご意見があれば，お聞かせください．（任意回答）

割愛

12. 最後に

勤務形態：専　任　37
　　非常勤　3
専攻語：　割愛